

## 生物多様性と「資源」化

概要：

「資源科学」を提唱したジンマーマンに拠れば、「資源」という言葉は、特定の事物そのものを指すというよりも、その事物の有する機能に対する人間の評価を示したものであるという。例えば、「森林」という言葉は、資源ではなく、特定の生態系を指し示している。しかし、森林の木材供給源としての潜在力が着目されるようになると、森林は豊かな「資源」として注目され始める。このように「資源」は、存在するものではなく、見出されるものであり、その見出され方は、資源の質に加えて、技術や行動範囲、文化、動員できる知識・資本等、さまざまな社会・経済・政治的なファクターによって左右されるのである。

本ワーキンググループでは、こうした森林の「資源」化のプロセスに光をあて、生物多様性をどのように評価するのかという問題に、社会科学、生態学双方の視点から切り込んでみたい。まず人文社会班佐藤チームが問題提起を行い、これに生態学の立場から丑丸敦氏、ポリティカル・エコロジーの立場から金澤謙太郎氏にそれぞれ論点をご提出いただく。その後、議論をフロアの参加者に開き、自然科学、社会科学の交点を模索する。